

名語記の唐音・和音・呉音

湯沢 質幸

先般、学会待望の『名語記』（二二六八―二七五成）の刊行が、「田山方南校閲 北野克写」のもとで行われた。語源辞書である本書を、漢字音資料の一つとして見ると、もとより漢字音関係の記述自体そう多くを見出せない。しかしながら、その系統の呼称については、興味深いものが散見する。以下、これに関して、刊行書によりつつ若干私見を述べてみたい。

全体を通じて「唐音・和音・呉音」の三語が見出される。もっとも多いのは「唐音」で七例、次が「和音」で四例、「呉音」は一例だけである。

a 和字ノイロハノカハルニ乃トカケルハイツレノ字ツヤ 補注 モシ 乃至ノ乃ナラハ 和音ニハナイトヨミ 唐音ニハタイ也 ノトイフヘキコトハリナシ イツレノ字ト心ウヘキソヤ如何ニ二三九オ・七九ベ
b 問 真言師ノ行法ニフル物ヲレイトナツク如何 答 レイハ鈴也 ……音ニハリヤウトイヒ唐音ニハレイトイヘル也四一六〇ウ・三五二

c キヌヤコソテナトヲツホヲルトイフ事アリ オルハ折レハナルヘシ ツホノ義如何 ツマヲル也 マハモニカヨヘリ モハ唐音ニハホトイハル、也四一七二オ・三七五ベ
d 御ノ字ヲオムトヨメリ 如何 オホマスノ反ハオム也 訓ノヨミトオホエタリ 音ニハ唐音ハキヨ 和音ハコ也 コレ呉音歟五二一オ・四九三ベ

e 豊後国ノフム如何 フコトイヘルヲ自然ニフムトイハル、也 豊

ヲフムトヨムニ非ス 唐音ニハホウ 和音ニハフ。也五一六七オ・五八六ベ

f 問 カフリニエイ如何 答 エイハ纒也 ヤウノ唐音ノエイ也

文官ノ人ハ垂纒 武官ノ人ハ巻纒也五一八八オ・六二八ベ

g 十ヲト、イヘルハタルノ反 ツ也 ツヲト、イヒナセル也 五音

堅通ノウヘ和音ノツハ唐音ニハカナラスト、ヨマル、也二〇一三八オ・一三九三ベ

○傍線は本稿の筆者。a d e g などから見ると、b の「音ニハ」は「和音ニハ」とあるべきように思われる。刊行書は、「音」字の上にくらかの余白を置いているが、あるいは、そこは原本虫くいの所であろうか。

まず、「唐音」について考えてみよう。「唐音」は、a b d e f の具体例 f の「纒」は、「広韻」でや、c g は、前田本・黒川本「色葉字類抄」や観智院本「類聚名義抄」等を参照するところ、c は模のモ・ボ、毛のモウ・ボウ、茂のモ・ボなど遇・効・流撰などの明母一等字の音を、g は都のツ・ト、図のツ・ト、頭のツ・ト・トウなど遇・流撰などの舌頭音一等字の音をそれぞれいっているものであろうことこの二点により、今日いう『漢音』（系字音）の呼称であったといえる。注1

このような意で唐音の用いられている例は、中古・中世を通じてさほどない。よく知られているのは、平安時代後鎌倉時代写になる九条家本『法華経音』巻末の声点図中のものである。そのほかには、馬淵和夫・沼本克明両氏により、『古事類苑』からの引用として紹介されている『後京極撰政記』正治三年（一一二〇）の記述中のものくらいしか、現時点では知られていない。この点において、『名語記』は貴重である。

次に、「和音」に移ってみよう。『名語記』で「和音」は、「唐音」と対のものとしてされているといふべきようであること、a d e など

おけるその具体例、また、右述の、gでとり扱っているであろう漢字の音のことなどを重ね合わせてみるところ、今日いう『吳音』(系字音)の呼称であったとしか考えようがない。^{注3)}

さて、残る「吳音」は何の呼称か。たった一つの具体例ということからしても、細かな検討は無理である。ただし、この書における「唐音」と「和音」の対といふべき関係や、この二語の、「吳音」という語よりも多い出現回数、そしてdでは音でなく訓を「吳音歟」としていることなどから推定すると、『名語記』の「吳音」は、日本漢字音の多くを占める「唐音」「和音」の埒外のもの^{注4)}一特殊ないしは特別な漢字音^{注4)}の呼称でなかったか、と考えられそうである。

ここまで述べてきたことがらを、『名語記』の成立年代をかえり見つつまとめてみると次のようになる。鎌倉時代中期には、今日いう『漢音』を「唐音」と、「吳音」を「和音」と、そして「唐音」「吳音」の埒外の音を「吳音」と呼ぶ学派があった。▽

ところで、鎌倉時代中期以前には、「唐音」「和音」「吳音」のほか、「正音」「漢音」「対馬音」^{注5)}などの呼称もあった。これらの呼称とその内容については、多くの先学によって論じられて来た。^{注6)}今日の通説、いな定説といふべきか、によると、大筋においては、『名語記』などのいう「唐音」は「正音」「漢音」に当たるといふことになる。また、「和音」「吳音」「対馬音」は、ほぼ同系のものの異称ということになるが、『名語記』では、こと「和音」と「吳音」とは別のものとしている点が注目される。

いずれにせよ、今後、『名語記』自体における呼称の性格をより明らかにする上でも、『名語記』のそれと『名語記』以前のそれとの関係を追究して行く必要がある。また、『名語記』成立当時そし

て以降のそれとの関係もしかりである。数多く残されているこれらの課題について、本稿の筆者は十分に述べるほどの準備がないのであるが、管見の限りでは、鎌倉時代以前には今日いう『唐音』という呼称に相当するものがなかったようであることとあいまって、とりわけ興味深く感ぜられるのは、『名語記』以降の次のような問題である。鎌倉時代における代表的な呼称は、たとえば、ロドリゲス著『日本大文典』^{注7)}に端的に引き継がれているように、「吳音」「漢音」「唐音」の三つである。これらは、おのおの、今日いう「吳音」「漢音」「唐音」(系字音)に相当する。ここに、『名語記』のいう「唐音」「和音」は、それぞれ「漢音」「吳音」に代わり、そして、その「唐音」は、宋代以降の中国音にもつく日本漢字音の呼称となったことが知られる。さて、そのような変化の原因は何か、また、それは鎌倉中期以降のいつ生じ始めたのか。「和音」はどこへ行つたのか。▽

これら、種々の問題を解く上でも、写本焼失のため、惜しくもこのたびの刊行書には入れられていない巻七の出版が待たれる。

注1 もちろん、このことは、「唐音」と呼ばれたすべての音が、完全に今日いう『漢音』と一致しているということを描べているわけではない。大筋において、ないしは全般的・全体的に見てそういえるだろうという意である。以下、「和音」や「漢音」等についても同様である。なお、eの「豊」の「広韻」における声調は平声なので、「ホウ」「フ」の『名語記』における声調は、今日いうそれぞれ『漢音』また『吳音』の声調の示す一般的な傾向に合わない。しかし、そのようなものは、今日いう『漢音』『吳音』の中にも数多く見出されるので、これをもって、「ホウ」「フ」をそれぞれ今日いう『漢音』『吳音』でないと決

めることはできない。

注2 馬淵氏(『日本韻学史の研究』Ⅱ一〇六六ペ)、沼本氏(『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』二七二ペ)。なお、『悉曇要訣』の中にも「唐音」は現れているが、それは、早く山田孝雄氏(『国語の中に於ける漢語の研究』一六四ペ)が指摘しているように、「中国音」といった意のものと認められる。

注3 なお、eの「フ」については1参照。

注4 これら「埒外」「特殊ないしは特別」などといった認識は、いうまでもなく『名語記』作者経尊においてのものである。したがって、今日いう『漢音』『吳音』系字音のあるものが、経尊においては「吳音」であったなどという可能性も十分ある。

注5 参考までに述べると、「対馬音」に関しては、岡田希雄氏(『鎌倉期の語源辞書名語記十帖に就いて』刊行書一四三四ペ)によると、巻七には次のような記述があるという。

○日本国ノ文字ノ音ノヨミヲツシマノヨミトイヘル如何、コレハ第一ノ卷ニクハシク申セリ、兩様アリ、一ニハ対馬ノ義、二ニハ秋津嶋ノ義也(卷一は欠本、巻七は刊行書には入っていない)。

岡田氏は、これにつき、「対馬音は所謂吳音である」という。しかし、こと刊行書内には、「対馬音」という語は見出せず、また、それが「所謂吳音」か否かを考える手がかりもない。

注6 たとえば、注2馬淵氏第三篇第三章、沼本氏本論第二章や二七〇ペ、二七三ペ、『国語学大辞典』『日本漢字音』(林史典氏執筆、高松政雄氏『日本漢字音の研究』序章など)。

注7 土井忠生氏訳本六六五ペ。

〔補注〕…「和字…字ソヤ」は、「かなでいるはの文字を書く時には、「同じ音をいろいろ字をかえて書く。ところで、『の』の音を『乃』と書く時があるが、その『乃』はどの漢字から来たもの

なのか。」の意と、私に解してみた。

(五八・四・十六)

—山形大学助教授—

(昭和五十八年四月十八日 受理)